

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

多良間島方言の語彙資料（1）：「多良間島方言辞典」作成のための

著者	下地 賀代子, 下地 正純
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	34
ページ	209-239
発行年	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/11857

多良間島方言の語彙資料(1)

—「多良間島方言辞典」作成のための—

下 地 賀代子
下 地 正 純

はじめに

多良間（島）方言については、その言語的特徴として、宮古、石垣両地域方言それぞれとの類似点を持つことが指摘されて久しい。「宮古方言」と「八重山方言」のいずれに属するのかという方言区画上の問題の解決にはさらなる比較研究が必要であるが、多良間（島）方言のこのいわば中間言語的な性格は、宮古諸方言と八重山諸方言の連続性、すなわち、両方言が共に「南琉球方言」として括られ得る根拠を提示していると言っても過言ではないだろう。この点において多良間（島）方言は、南琉球方言研究はもとより、「琉球語」研究全体において非常に興味深い存在となっている。

我々は現在、下地正純氏がこれまで記録してきた「語彙カード」を基に、「多良間島方言辞典」の作成のための語彙の収集と整理の作業を進めている。詳細は後述するが、意味記述や用例などについて「Katara会」（下地正純氏代表）で検討を行い、下地賀代子（以下敬称なしの下地）がその結果を入力、まとめるという形をとっている。本稿は、ここまでの経過とまとめた語彙資料の一部を明文化し、今後の作業の目安とすることを企図している。また同時に、本稿によって、辞書としての項目の立て方や意味記述の仕方などについての指摘や意見を賜ることができれば、と考えている¹。

ここで、下地正純氏の言語歴について記しておく。氏は1933年8月に多良間島の塩川字で誕生し、小学校卒業の12歳までを同島で過ごした。なお、両親とも同島出身である。13歳のとき、父親の仕事の都合により一家で宮古島の平良市に移住し、17歳まで同地で過ごした。多良間島には高校がないため、同島の子供たちは中学校卒業後その多くが宮古島にある高等学校へ進学する。よって、家庭ではもちろんのこと、外でもよく多良間島方言を使っていたという。18歳から進学のため沖縄本島の那覇市に移り、卒業後は教員となった。本島各地の高校で生物教師として勤務し、沖縄の高等教育に貢献し続けた。1990年3月に定年退職、現在に至っている。

氏はもともと多良間の歴史、文化に関心があり、特に古謡は、在職中からさまざまな解説書を手掛かりに独学していたという。そのような中、現在話されている多良間島方言についても、いずれは古謡の中の言葉のように誰にも意味が分からなくなってしまうのではないか、と危惧するようになり、退職後1995年頃から現在に至るまで、多良間島方言の語

彙をカードの形で記録し続けている。

1. 作業について

1-1 「語彙カード」の概要

本稿では、下地正純氏が長年にわたって記録し続けてきた、多良間島方言の語彙について記されたカードの全体を「語彙カード」と呼んでいる。原則的に1カードに1語彙、それを50音順に並べ、冊子の形に綴じている。アからン（ん）まで、全74冊、およそ27,000枚に及んでいる。このうち「ア」から「コン〜」までの語が収められた26冊（5553枚）は下地が預かり、データ化（Excelへのベタ入力、業者委託）してある。いくつか重複は見られるものの、検討作業の過程でカードに記されていない語が多く出てきており、またカードへの記録も現在進行形であることから、語彙数は今後さらに増えると思われる。

「語彙カード」は、氏の内省による他、『多良間の民話』や『村誌たらま島』、『多良間村史』（以下それぞれ『民話』、『村誌』、『村史』）、『多良間の民謡』など多良間に関する書をはじめ、『宮古史伝』や『宮古島庶民史』、また平山輝男ほか編『現代日本語方言大辞典』、仲宗根政善著『沖縄今帰仁方言辞典』も手がかりとしつつ、作成されている。記述の内容について、全てのカードに及んでいるわけではないが、仮名書きによる見出し語ⁱⁱ、品詞、意味、また動詞と形容詞の一部には例文も記されている。

1-2 作業内容

整理・まとめの作業は次のように進められている。まず「語彙カード」を基に、下地が意味記述の校正・加筆、品詞の確定、見出し語および用例への音声・音韻表記の付加などを行う。また用例がない語にはこれを追加する。用例は、『民話』もしくは下地がこれまでの調査によって得た事例の中から求めている。見つからない場合は、『村誌』、『村史』などの記述を参考に、共通語で用例案を示しておく。次に、上記手順によってまとめた原稿の全ての内容を、今回の作業のために結成された「〔Katara（語ら）宝ぬたらまふつ〕の会」（略称「Katara会」）の定例会において検討していくⁱⁱⁱ。定例会は平成21年7月から月1～2回のペースで定期的に行っており、現在のメンバーは下地正純氏、渡久山朝一氏（1939年塩川生）、下地一男（1942年仲筋生）の3名である^{iv}。定例会の内容は全て録音されており、下地はその検討内容を受けてさらなる校正を行う。そしてそれを、新たな原稿と共に再度Katara会が検討する。

2. 語彙資料について

2-1 表記

見出し語および用例のいずれにも仮名表記を用い、これにさらに、前者にはIPA、後者

には音韻による表記をそれぞれ併記している。音韻と仮名の対応表を以下に示す^v。

a	e	ë:	i	ĩ	u	ü:	(o)
ア	エ	エ [°]	イ	イ [°]	ウ	ウ [°]	オ
ha	he	*	(hi)	*	-	-	ho
ハ	ヘ	((ヘ [°] ー))	ヒ	((ヒイ [°]))			ホ
ka	ke	kë:	ki	kĩ	ku	kü:	ko
カ	ケ	ケ [°] ー	キ	キイ [°]	ク	クウ [°] ー	コ
ga	ge	gë:	gi	gĩ	gu	gü:	go
ガ	ゲ	ゲ [°] ー	ギ	ギイ [°]	グ	グウ [°] ー	ゴ
ta	te	-	ti	-	tu	-	to
タ	テ		テイ		トゥ		ト
da	(de)	-	di	-	du	-	(do)
ダ	デ		デイ		ドゥ		ド
-	(ce)	cë:	ci	cĩ	cu	cü:	-
	ツエ	ツエ [°] ー	チ	ツイ [°]	ツ	ツウ [°] ー	
sa	(se)	së:	si	sĩ	su	sü:	(so)
サ	セ	セ [°] ー	シ	スイ [°]	ス	スウ [°] ー	ソ
(za)	(ze)	zë:	zji/zi	zĩ	zu	zü:	(zo)
ザ	ゼ	ゼ [°] ー	ジ/ズイ	ズイ [°]	ズ	ズウ [°] ー	ゾ
ra	(re)	-	ri	-	ru	-	(ro)
ラ	レ		リ		ル		ロ
na	(ne)	-	ni	-	nu	-	(no)
ナ	ネ		ニ		ヌ		ノ
fa	*	*	fi	(fĩ)	fu	*	*
ファ	((フェ))	((フェ [°] ー))	フィ	フィ [°]	フ	((フウ [°] ー))	((フオ))
va	*	*	vi	vĩ	vu	*	*
ヴァ	((ヴェ))	((ヴェ [°] ー))	ヴィ	ヴィ [°]	ヴ	((ヴウ [°] ー))	((ヴォ))
pa	(pe)	*	pi	pĩ	pu	*	(po)
パ	ペ	((ペ [°] ー))	ピ	ピイ [°]	プ	((プウ [°] ー))	ポ
ba	(be)	bë:	bi	bĩ	bu	bü:	(bo)
バ	ベ	ベ [°] ー	ビ	ビイ [°]	ブ	ブウ [°] ー	ボ
ma	me	*	mi	mĩ	mu	*	(mo)
マ	メ	((メ [°] ー))	ミ	ミイ [°]	ム	((ムウ [°] ー))	モ

ja	ヤ	je	イエ	ju	ユ	jo	ヨ	wa	ワ	we	ウエ
hja	ヒヤ	-		*	((ヒユ))	*	((ヒヨ))				
(kja)	キヤ	-		kju	キユ	kjo	キヨ				
*	((ギヤ))	-		*	((ギユ))	(gjo)	ギヨ				
cja	チャ	*	((チェ))	cju	チュ	cjo	チョ				
sja	シャ	sje	シェ	sju	シュ	sjo	ショ				
zja	ジャ	*	((ジエ))	zju	ジュ	zjo	ジョ				
*	((リヤ))	*	((リエ))	rju	リュ	rjo	リヨ				
*	((ニヤ))	*	((ニエ))	nju	ニュ	*	((ニヨ))				
pja	ピヤ	-		*	((ピユ))	pjo	ピヨ				
(bjja)	ビヤ	-		bju	ビユ	bjo	ビヨ				
*	((ミヤ))	-		mju	ミュ	*	((ミヨ))				

q [p, f, v, s, ə, k, t, d, l]	N [n~ɲ, ŋ, (m)]	M [m]	L [l]
ッ (促音)	ン (撥音、両唇開)	ん (撥音、両唇閉)	り°

2-2 動詞の活用のタイプ

動詞の見出し語については、下記のようにその活用のタイプも示した。「~」は語幹と接辞の切れ目を示す。まず規則変化タイプと不規則変化タイプ（Ⅲ類）に二分され、前者はさらに、強変化タイプ（Ⅰ類）と弱変化タイプ（Ⅱ類）に分かれる^{vi}。

Ⅰ類 A	kak~ī 書く、	kak~aN 書カヌ、	kak~iqti: 書イテ
B	pus~ī 干ス、	pusj~aN 干サヌ、	pus~iqti: 干シテ
C	tuL~∅ 取ル、	tur~aN 取ラヌ、	tur~iqti: 取ッテ
D	fu:~∅ 食ウ、	fa:~N 食ワヌ、	fe:~qti: 食ッテ
D' (伸筋)	kau~∅ 買う	ka:~N 買ワヌ	ke:~qti: 買ッテ
(塩川)	ko:~∅ 〃	ka:~N 〃	ke:~qti: 〃
Ⅱ類	uki~L 起キル、	uki~N 起キヌ、	uki~qti: 起キテ
Ⅲ類	kī:~∅ 来ル、	ku~N 来ヌ、	ki:~qti: 来テ

2-3 並び、項目などについて

見出し語の並びについて、「ア (a)・アー (a:)・イ (i)・イー (i:)・イ° (i)・イ°ー (i:)・ウ (u)・ウー (u:)・エー (e:)・オー (o:)」の母音の順とする。子音のいわゆる清濁につ

いては、清音の後に濁音の順とする。

また、作業原稿には「備考」の項目があり、語法上の注記や注釈などをそこに記しているが、より多くの語彙を示すために本稿ではこれを割愛した。ここでは特記すべきと判断されるものだけに限り、注に示すこととする。なお、現在検討中の事柄には「？」を付した。

3. 方言語彙資料^{vii}

<p>ア [a] 代名詞</p> <p>【吾】 1人称代名詞「わたし」の意をあらわす。古典語の1人称代名詞「あ、あれ」に相当する。代名詞アンの異形態。単独では現れず、常に格助辞ガと一緒に用いられる（非自立形式）。</p> <p>例) キイ°ヌー アガ シュバン ブタリ° ピイ°トー、バガ ウットウ /kinu: a-ga sjuba-N bu-taL pito:, ba-ga uqtu/ 昨日私の傍にいた人は、私の弟（だ）。</p>
<p>ア [a] 感動詞</p> <p>①相手の発話などを受け、その反論や異なる意見を言いはじめる際などに用いられることば。いや。あら。ああ。</p> <p>例) アシュガドゥ アティ ガバ アラン。 — ア、ツイ°フータカーユ。 /asjugadu ati gaba ar-aN (ノ) — a, cifu:taka:=ju (ノ) / だけど（あの畑のニラは）あまりにも古いのじゃない？— あら、仕分けたら（いいさ）。</p> <p>②思いがけないことに出くわし、驚いたときに発することば。ああ。あっ。（→「ア—<感>」①）</p> <p>例) リューヤ “ア、ヤツカイナ ムヌ、カンシヌ トウクルー ミーラリー ネーン、ヌーガ シューズイ°ーガ”ティ—、/rju:-ja “a, jaqkaina munu, kaNsinu tukuru: mirari: ne:N, nu-ga sju:-zi:=ga”-ti:/ 竜は「あっ、しまった、こんなところを見られてしまうとは、どうしようか」と（『民』「竜になった蛇」）</p> <p>③会話の中で、新しい内容のコトガラについて話し始めるときに発することば。ああ。</p> <p>例) ア、ノーキョーン、ナスビイ°ガ ナイユ ヅヴィーり°バ、サンボン ケーキイ°タリ° /a, no:kjo:-N, nasubi-ga nai-ju qvi:L-ba, saNboN ke: ki-taL/ あ、農協でナスの苗を売っていたから、3本買って来た（よ）。</p> <p>④相手の発話などを受け、それに対する考えを言いはじめる際に用いられることば。ああ。（→「ア—<感>」の②）</p> <p>例) ア、バガドゥ バリ°ラータリ°、ユルシー ヅフィル /a, ba-ga-du baLra-taL, jurusi: qfiru/ ああ、私が悪かった、許してくれ。（『民』「黄金のかめ」）</p>

-ア [a] 助辞

現代共通語の係助辞「-は」に対応する**-ヤ**の異形態。大きく分けて、同類のモノゴトからそのモノゴトを抜き出して対立的に捉える用法（＜対比＞）と、文頭におかれて話の中心となる題目を表す用法（＜提題＞）を持つ。

例) タラマカラ オトーヤ イキイ°、ナラー クマンケー キイ°ーティ /tarama-kara oto:ja iki, nara: kuma-Nke: kü-ti/ 多良間からお父さんは行った、（それと入れ替わりで）自分はここへ来たって。〔直〕多良間からお父さんは行く、自分はここへ来ると〕

カタ チャー ウレー. サンピンチャーヤ カタシャダーリ° /kata cja: ure: saNpiNcja:ja katasjada:L/ 濃いお茶それは。サンピン茶は濃い

アー [a:] 名詞

【粟】植物名。あわ。イネ科の一年生作物。種は小つぶで黄色。五穀の1つであり、食用。

例) ターガ ウマン アーユ スイ°ケーシー ウキイ°バー /ta:ga uma-N a:ju sike:si: uki-ba:/ 誰がここに粟を散らかしてあるの。

アー [a:] 感動詞

①驚きを受けたときや感心したときに発することば。ああ。

例) アー カンシーヌ キツイ°ギ ミドゥンティマイ アリ°ナ /a: kaNsi:nu kicigi miduM-ti-mai aL=na/ ああ、あんな綺麗な女性ともあるのか。（『民』「讒言がじゃわら」）

②相手の発話やあるデキゴトを受け、思いついたことや考えなどを話し始めるときに発することば。ああ。（→「ア<感>」の④）

例) ワーヤ ニンガマヌ イ°ジー、“アー、クレー イシュギー トゥイユ ウガマダカー ナラン”ティ イシュギー イキー /wa:-ja niN-gama-nu izi:, “a: kure: isjugi: tui-ju ugam-adaka: nar-aN”-ti: isjugi: iki:/ ブタは真剣に、「ああこれは急いで干支を拜まなければならない」と急いで行って、（『民』「十二支由来」）

アー、クレー ククルミードゥ ミーズイ°ー /a:, kure: kukurumi:du mi:zi:/ ああ、これは（ちょっと）試してみよう。（『民』「カニツミガウエーニ」）

③相手の発話を受け、それを肯定する、また納得したことを表す。ああ。ええ。

例) A: タウ アリー. — B: ミガガ んマガ. — A: アー. /A: tau ari:. — B: miga-ga Mmaga. — A: a: / 「(その子は) 誰?」—「ミガの孫。」—「ああ。」

④単なる相槌。ああ。

例) アー アンシーナ /a: aNsi:=na/ ああ、そうですか。

“アー、バガドゥ ンナウ ムティー ブリ°, デー”ティ /”a:, ba-ga-du Nna-u muti: buL, de:”-ti/ （縄が欲しいと独り言を言っている人に）「ああ、私が縄を持っています。さあ（どうぞ）」と、（『民』「縄で幸福になった話」）

<p>アーイ¹ [aꜜꜜ i] 感動詞</p> <p>相手への呼びかけ、制止に用いることば。こら。</p> <p>例) アーイ ターガガ ピイ°トウヌ スイ°ツジャウ トゥリーり° /ai ta:ga-ga pītu-nu siqzja-u turi:L/ こら！誰が人のサトウキビを盗っている (のか)</p>
<p>アーイ² [aꜜ ꜜi] 感動詞</p> <p>驚いたり、怪しんだりしているときに発することば。あれ。</p> <p>例) アーイ ヌスタイ^{viii} ナマガミ クンガー /ai nusutai nama-gami ku-N=ga:/ あれ、どうして今になっても来ない (の) か。</p> <p>アーイ ナラー、トゥユミガナスイ°ガ プカンヤ、アンシー ピイ°トウトウヌ カンケーマイ ネーンシュガ /ai nara:, tujumiganasi-ga puka-N-ja, aNsi: pītu-tunu kaNke:-mai ne:N-sjuga/ あれ、私は豊見親様の他には、他人と関係したことなどないのに (なぜ妊娠してしまっているのか)。{直} あれ自分は、豊見親加奈志の他には、そのように人との関係もないのに (『民』「天太の子」)</p>
<p>アーイー [a ꜜiꜜ ꜜ] 感動詞</p> <p>相手の説明に対して、その内容に納得していることを表す。ああそうか。アイー[aiꜜ ꜜ] とも。</p> <p>例) アーイー、アンシードウ アタリ°ナー /ai:, aNsi:-du a-taL=na:/ ああそうか、そうだったのか。</p> <p>アーイー、んメ、アンシーヌ パガマ カッヴィイ°ー ムヌガマ アラバマイ、シャーリー キー ミドウん シュダカー ナラン /ai:, Mme, aNsi:nu pagama kaq vi: munu-gama ar-aba-mai, sja:ri: ki: miduM sju-daka: nar-aN/ ああそうか、(それなら) そのようにハガマ (を) 被っている人だけど、連れて帰って妻にしよう。{直} ~ハガマ (を) 被るものであれども、連れて来て女 (に) しなければならぬ (『民』「ハガマ被り娘の話」)</p>
<p>アーウ [aꜜu] 副詞 (擬声語)、名詞</p> <p>①猫の鳴き声。ニャー。(副詞・擬声語)</p> <p>例) ンダンガ ニカヌ アーウティ ナキー ブり° (ノ) /Nda-N-ga nika-nu a:u-ti naki: buL/ どこで猫がニャーと鳴いている (のか)。</p> <p>②猫そのものの意味にもなる。(名詞・幼児語)</p> <p>例) ウリ アーウヌ キイ°んどー /uri a:u-nu ki-M=do:/ ほら猫が来るよ。</p>
<p>アーガラ [aꜜgara] 名詞</p> <p>【粟幹】脱穀をした後の粟の茎や葉。粟のわら。あわがら。アーグルとも。</p> <p>例) ハイ バシャバシャティー アーガラウ アツイ°ミー メーシ /hai basjabasjati: a:gara-u acimi: me:si/ ほら、さっさと粟がらを集めて燃やせ。</p>
<p>アーカリ[°] [aꜜkal] 名詞</p> <p>粟を刈ること、収穫すること。</p>

<p>例) アーカリ°ガ イキイ° /a:kaL-ga iki/ 粟刈りに行く。 んメ アーカリ°ヌ スツイ°ナー /Mme a:kaL-nu suci=na/ そろそろ粟刈りの季節(だ)ね。</p>
<p>アーキチャミ [a:kɪtʃami] 感動詞 心が落ち着かずいらしている気持ちや反発している気持ち、また、強い驚きを表す。 ああもう!うわ! 例) アーキチャミ バンヤ ウルーバー シューマン /a:kicjami baN-ja uru:ba: sju:maN/ ああもう!私はそれはしたくない。{直}それをばしない} シャーロー んメ、“アーキチャミ、クレー ヌーガ シューズィ°ーガー!” ティ バンキイ°バドゥ、/sja:ro: Mme, “a:kicjami, kure: nu:ga sju:zi:=ga” -ti baNki-badu/ (何者かに尾を掴まれ,)猿はもう、「うわー!これはどうしたらいいんだ!」と叫ぶから、(『民』『漏り加奈志』)</p>
<p>アーグー [a:ɣu:] 名詞 【粟粉】粟を石臼などで挽いて粉状にしたもの。粟の粉。もちや神酒の材料になった。 例) アーグーンケー んユ マツジー ムツウ°ー ツイ°(ッ) フィ°タリ°ix /a:gu:Nke: M:ju maqzi: mucü: ci (q) fi-taL/ 粟の粉に芋を混ぜてもちを作った。</p>
<p>アーグル [a:ɣuru] 名詞 名詞アーガラに同じ。粟がら。</p>
<p>アーシャ [a:ʃa] 名詞 植物名。海藻の一種。ヒトエグサ(一重草)。主に吸い物や味噌汁の具として、また最近では、佃煮や天ぷらの具に入れるなどして広く食されている。 例) アーシャヌ ムイーリ° /a:sja-nu mui:L/ ヒトエグサが生えている</p>
<p>アージャキ [a:dʒaki] 名詞 【粟酒】粟を醸してつくった酒。かつては島内で醸造し、嗜好されていた。 例) カナガイヤ タラマンヤ、ドゥータニー アージャキウ タリー ヌミータリ° /kanagai-ja tarama-N-ja, du:-ta-ni: a:zjaki-u tari: numi-taL/ 昔は多良間では、自分たちで粟酒を醸して飲んでいた。</p>
<p>アーシャズィ°ル [a:ʃaziru] 名詞 ヒトエグサの汁物。醤油、味噌などで味付けされる。その他の具材として豆腐の角切りが加えられたりもする。 例) アーシャズィ°ル アタカー ピイ°タキナ ツイ°(ッ) ファイドゥ スィ° /a:sjaziru a-taka: pitakina ci (q) fai-du si/ アーシャ汁だったらすぐに作れるよ。</p>
<p>アーシャトゥリ° [a:ʃatu:] 名詞 干潮時に、岩礁に生えているヒトエグサを採ること。 例) マーツィ°キ アーシャトゥリ°ガ イカマンナ /ma:ciki a:sjatuL-ga ika-maN=na/ 一緒にヒトエグサ採りに行かないか。</p>

<p>アーシャトゥッラ ンダヌ インヌガ ワーティガー /a:sjatuqra Nda-nu iM-nu-ga wati=ga:/ ヒトエグサ採りはどこの海がいいかねえ。</p>
<p>アーजूシ [aɔdʒu:ʃiɾ] 名詞 【粟雑炊】 野菜を混ぜ、味付けをして粟を炊いたもの。粟で作った雑炊。 例) アーजूシウ ニー ウキィ°バ アトゥカラ ファーダナー /a:zju:si-u ni: uki-ba atu-kara fada=na:/ 粟雑炊を炊いてあるから、後で食べてね。</p>
<p>アージュオーノー [aɔdʒo:ɲoɔ] 名詞 【粟上納】 年貢として粟を納めること。 例) カナガイヤ タラマンヤ、イチニンマイン ナリ°タカー、アージュオーノーユドゥ、(中略) ウシャミー プタリ°ティ /kanagai-ja tarama-N-ja, iciniNmai-N naL-taka:, a:zjo:no:ju-du, usjami: bu-taL-ti/ 昔は多良間では、一人前になったら、粟上納を、(中略) 納めていたそうだ。(『民』「パルマツツの由来」)</p>
<p>アースィ¹ [a:si] 動詞 (I類B) 【合わす】 複数のモノ・コトガラを1つにする。 ① 2つのモノがぴったりと接するようにする、くっつける。 例) ウEMATU ケMATU、カドゥカドゥー アースィ°バドゥ チューシャ ナリ° /wema-tu kema-tu, kadukadu: a:si-badu cju:sja naL/ こちらとそちらと、角々を合わせると強くなる。 んメ ウマカラ カユー ピィ°トウヌ んメー、ティーユ アーシャングトウナヌ ピィ°トー ネーダタンティ /Mme uma-kara kaju: pītu-nu Mme:, ti:ju a:sjaN-gutu-na-nu pīto: ne:-dataM-ti:/ もうそこを通る人たちは、(お爺さんの墓標に) 手を合わさないような人はなかったそうだ。(『民』「王様に生まれ変わったお爺」) ② 数種類の食品・薬品などを混ぜる、混合する、調合する。 例) タリニツィ°ンケーヤ シャキトゥ んシユー アーシー ヌンバドゥ ノーリ° /tarinici-Nke:ja sjaki-tu Msju: a:si: nuM-badu no:L/ 長引く熱には、酒に味噌を合わせて飲むと治る。 ③ 複数のモノゴトや人の動作などを一致させる、対応・調和させる。 例) クイウ アーシー エーグー スィ°ー /kui-u a:si: e:gu: si:/ 声を合わせて歌を歌う。{直} ~歌をする{ ビィ°ンヌ フタウ アーシーミール /biN-nu futa-u a:si: mi:ru/ ビンのふたを合わせてみる。 ④ 数・量を合算する、合計する。 例) ヅヴァトゥ バガ モーキウ アースィ°タカー イスカンガ ナリ°ガ /qva-tu ba-ga mo:ki-u a:si-taka: isuka-N-ga naL-ga/ あなたと私の儲けを合わせたらいくらになるか。</p>

⑤他の動詞の（狭義の）連用形につき、複合動詞をつくる。その際、複数のモノやコトガラを1つにするという意味を添える。

例) フタツラス ムッスウ[°]ー ツゲーシャダ (=ツギアーシャダ) /futaqra-nu muqsü: cuge:sja-da/ 二枚のむしろを継ぎ合わせなさい。

アースイ^{°2} [a:sɪ] 動詞 (I類B)

【会わず・遭わず】ヒトやモノゴトに接近・接触させる、出くわさせる。

①2人のヒトを対面させる、対面するように仕向ける。

例) キューヤ タルトウ ミガウ パズイ[°]ミティドゥ アースイ[°]ドー /kju:ja taru-tu miga-u pazimiti-du a:sɪ=do:/ 今日(今日は)タルとミガを初めて会わせるよ。

②相手が好ましくないデキゴトに出くわすようにする。自然現象など、非意志的なコトガラには使えない。

例) ウトゥリ[°]グトゥン アーシー ミーリ[°]バドゥ ウムクトー ンディリ[°]
/utuL-gutu-N a:sɪ: mi:L-badu umu-kuto: NdiL/ 恐ろしい目に遭わせれば知恵は出る。

アースイ^{°3} [a:sɪ] 動詞 (I類B)

粉や土などに水を加えて練り混ぜる、こねる。

例) ムツイ[°]ーゲーユ アースイ[°] /mucɪ:gu:ju a:sɪ/ 餅の粉をこねる
んタウ アースイ[°] /Mta-u a:sɪ/ 土をこねる。
シミンユ アーシ /simiN-ju a:sɪ/ セメントを混ぜなさい。

アースイ^{°4} [a:sɪ] 動詞 (I類B)

戦わせる、けんかさせる。

例) ウキイ[°]ナーンヤ “トーギュー”ティードゥ マイツイ[°]キイ[°] ウスウ[°]ー アースイ[°] /ukina:-N-ja “to:gju:”-ti-du maiciki usü: a:sɪ/ 沖縄では「闘牛」として、毎月牛を戦わせる。

アーズイ[°]ー [a:zdzi:] 名詞

【粟地】粟を栽培する畑。粟畑。

例) アーズイ[°]ーンカドゥ マミウ マキー ウキイ[°] /a:zi:-Nka-du mami-u maki: uki/ 粟畑に豆を撒いてある。{直} 粟畑にぞ豆を撒きおく}

アースイ[°]ギイン [a:sigɪn] 名詞

【袷着物】裏地をつけた着物。あわせの着物。冬用の衣服として用いられた。

例) トーティー ピラフヌ バーン、ドゥーガ ッファンヤ アースイ[°]ギインヤ ナナツイ[°] ヤーツウ[°]ー キイ[°]シー、ヌフーフ シー、/to:ti: pirafu-nu ba:N, du:ga qfa-N-ja a:sigiN-ja nanaci ja:cü: kisi:, nufu:nufu si:/ 大変な寒さのときに、自分の子には袷着物を7つ8つ着せて、暖かくして、{直} ~自分の子には袷着物は7つ8つを着せて~} (『民』「袷と蓑笠」<音>)

<p>アースィ°ズィ° [a:sizi] 名詞</p> <p>粟粒。粟の実のつぶ。</p> <p>例) アースィ°ズィ°ヌ スィ°ケーリリー° /a:sizi-nu sike:ri:L/ 粟粒が散らばっている。</p>
<p>アースィ°ヌー [a:sinu:] 動詞 (I類D?)</p> <p>布など、2つのモノが接した状態を保つように糸などで縫う。合わせ縫う。動詞アースィ°¹ とヌーがくみあわさった複合動詞。なお、条件形をとれないなど、活用形が不揃いである。</p> <p>例) フタツラヌ ヌヌー アースィ°ヌー /futaqra-nu nunu: a:sinu:/ 2枚の布を合わせ縫う。</p> <p>デー^ン アトゥ^ン マタ^ヌ カタ^ウ アースィ°ヌー スィ°バド^ウ ズボン^ー ナリ° /de:N atu-N mata-nu kata-u a:sinu: siba^{du} zuboN: naL/ 最後に股の部分 を合わせ縫えば、ズボンになる。</p>
<p>アーダーラ [a:da:ra] 名詞</p> <p>【粟俵】 粟を入れた俵。カヤヤススキの葉で編まれた。</p> <p>例) ピィ°トゥターラ ルクズィ°ツキマイ アリ° アーダーラー カタン ヌーシッ ティー、/pi^{tu}-ta:ra rukuzi^{qki}-mai aL a:da:ra: kata-N nu:siqti:./ 1俵60斤もある 粟俵を肩に乗せて、</p>
<p>アーダニ [a:da:ni] 名詞</p> <p>【粟種】 粟の種子。</p> <p>例) ヤーニヌ アーダニウ カリ°ガ イカズィ°ー /ja:ni-nu a:da:ni-u kaL-ga ika -zi:/ (私は) 来年の粟種 (にする分の穂) を刈りに行くよ。</p>
<p>アーダニフクル [a:da:ni^Φu^{ku}ru:] 名詞</p> <p>【粟種袋】 播種の際に、粟の種子を入れて持つための袋。</p> <p>例) タニマキィ°ガ パルンケー イカッジー、アーダニフクルー ムティー クー /tanimaki-ga paru-Nke: ikaqzi:, a:danifukuru: muti: ku:/ 種撒きしに畑に行く から、粟種袋を持ってこい。</p>
<p>アートルトウ (-) [a:to:tu (z)] 感動詞</p> <p>【あな たふと (尊)】 神仏へのおそれかしこまっている気持ちを表す、礼拝・祈願のときに用いることば。トートルトウとも。</p> <p>例) アートルトウー、ケンコーユ ニガーシー ワーリ /a:to:tu:, keNko:- ju niga:si: wa:ri/ アートルトウー、健康でいられますように。{直} 健康を願わせて ください }</p>
<p>アートルィ°シーナ [a:tu:lʃi:na] 名詞</p> <p>さとうきびの煮汁の泡を取り除くための道具。ふるいの種類の1つ。アーブクシーナとも。</p>

<p>例) シューガドゥ カナアンニー アートゥり°シーナウ ツィ°ッフィー ワーリーり° /sju:ga-du kanaaM-ni: a:tuLsi:na-u ciqfi: wari:L/ おじいさんが金網で泡取り用のふるいを作りなざっている。</p>
<p>アーヌイ°ー [aɽnu i:] 名詞 【粟の飯】 粟をそのまま炊いたもの。粟ご飯。 例) キューヤ アーヌイ°ーユ ファーズィ°ー /kju:ja a:nu-i:ju fa:zi:/ 今日は粟ご飯を食べる (ぞ)。</p>
<p>アーヌフシャトゥり° [aɽnu ɸɯʃatʉ] 名詞 【粟の草取り】 粟畑の草取り。粟畑の除草、また粟の間引きをすること。数回行われ、最初の除草はアラフシャ (イチドゥ フシャとも)、2度目はニドゥ フシャ、3度目はシャンドゥ フシャと言う。 例) アター アーヌ フシャトゥッル シュダカー ナラン /ata: a:nu-fusjatuqru sju-daka: nar-aN/ 明日は粟の草取りをしなければならない (な)。</p>
<p>アーヌユー [aɽnu ju:] 名詞 水加減を多めにして、粟をやわらかく炊いたもの。粟で作ったおかゆ。粟粥。 例) ニツィ°バ シー ニニー ブり° ッファン アーヌユー ファースィ°タり° /nici-ba si: nini: buL qfa-N a:nu-ju: fa:si-taL/ 熱を出して寝ている子どもに、粟粥 (を) 食べさせた。{直} 熱をして~}</p>
<p>アーヌンカ [aɽnu ŋka] 名詞 【粟の糠】 玄粟を精白する過程で取れる、粟の種皮や胚芽の粉状になったもの。粟糠。</p>
<p>アープーり° [aɽpu:] 名詞 粟の初穂祭り。実りに感謝し (結願)、さらなる豊作を祈願する。現在も続く年中行事の1つであり、旧暦の4月の「きのえ」または「つちのえ」の日に行われる。 例) クトゥスィ°ヌ アープーり°ヌ ジンヤ んメ ウシャミッタ /kutusi-nu a:pu:L-nu ziN-ja Mme usjamiqta/ 今年の粟の初穂祭りのお金はもう納めた (よ)。</p>
<p>アーブキ [aɽbuki] 名詞 粟の殻、外皮。また粟を玄粟にする過程 (籾摺り) で摺り落とされる、粉状になったもの。もみ殻に相当する部分。 例) ムイジョーキニー アーブキウ トゥバシ /muizjo:ki-ni: a:buki-u tabasi/ ムイジョーキ {平ザルの種類} で粟殻を取り除け。{直} ~粟殻を飛ばせ}</p>
<p>アーブク [aɽbukʉ] 名詞 【泡吹く】 液体が空気やガスを包んで丸く膨らんだもの。あぶく。泡。ただし、不快だと感じられるものに対しては使われない。 例) スツジャズィ°ルー ニーり°バドゥ アーブクヌ ンディり° /suqzjaziru: ni:L-badu a:buku-nu NdiL/ さとうきび汁を煮ると泡が出る。</p>

シッキンヌ アーブク /siqkiN-nu a:buku/ 石鹸の泡
アーブクシーナ [aɔbuukuɕiɕina] 名詞 名詞 アートウリ°シーナ に同じ。ふるいの種類の1つ。
アーマ [aɔma] 名詞 気が抜けるなどしてぼんやりしているさま。ボーっとしているさま。 例) ヌスタイ アーマウ シー ブリ°バー /nusutai a:ma-u si: buL-ba:/ なぜぼんやりしているんだ。{ 直} どうして<気の抜けたさま>をしているから{
アーマガイ° [aɔmaguii] 名詞 同じことを何度も何度も繰り返して、論し聞かせること。小言。(?) 例) ケー カレー イツイ°マイ アーマガイ°バ シーリ° /ke: kare icimai a:maguii-ba si:L/ ああ、あの人はいつも小言を言っている。 ウェー マタ アーマガイ°ヌ パズイ°マリッタッター /we: mata a:maguii-nu pazimariɕtaɕra:/ ほら、また小言がはじまったよ。
アーミスィ° [aɔmisi] 名詞 【粟神酒】 粟を原料として作られた神酒。 例) カナガイヤ、アーミスウ°ドゥ ツィ°ツフィー、ユントウバカリ°ヌ カミノ ナナツ ヤーツ ツィ°ツフィー カジャリ°タリドゥ、/kanagai-ja, a:misü:-du ciqfi:, juNtu-bakaL-nu kami-nu nanacu ja:cu ciqfi: kazjaL-tari:du/ 昔は、粟神酒を作って、4斗ぐらいの甕の7つ8つ(分ぐらいを)作って供えたから、{ 直} ~飾ったから{ (『民』「ストウガンの由来」<音>)
アームツィ°ー [aɔmuɕsiɕ] 名詞 【粟餅】 粟だけで作られた餅。粟以外の複数の材料から作られている場合は、粟が主の材料となっている餅。 例) カナガイヤ イルイルヌ ムツィ°ーヌ アタリ°ルガドゥ、アームツィ°ーヌドゥ デーン んマシャータリ° /kanagai-ja iruiru-nu mucü:-nu a-taLrugadu, a:mucü:-nu-du de:N Mmasja:taL/ 昔は色々な餅があったけど、粟餅が一番おいしかった。
アーラ [aɔɾa] 感動詞 意外なコトガラに感心している気持ちを表す。相手を褒めるときなどに用いられることば。まあ。 例) カリ°ガマイドゥナー、アンシヌ クトゥー スィ°ー、アーラ /kaL-ga-mai-du =na:, aNsinu kutu: si:, a:ra/ あの人があんなことまでできるの!? まあ! { 直} あれがね、あんなことをする!? まあ{ アーラ、カヌ ピィ°トー、アンシヌ スグリ° トウクルマイドゥ アタリ°ナー /ara, kanu pi:to:, aNsinu suguL tukuru-mai-du a-taL=na:/ まあ!あの人は、あんな優れたところがあったのか。

<p>アーリリ° [aʀil] 動詞 (Ⅱ類) 動詞アバリリ°の異形態。暴れる。</p>
<p>アーン [aʀm] 名詞 眠い時、退屈な時、疲労した時などに不随意に起こる呼吸運動。あくび。 例) クバヌパー アウギイ°ガマー ムットウイ、キーヌ カギンカ ナガアーン バ シーナ ブリー ウキイ°シャーミー /kuba-nu-pa: augi-gama: muqtui, ki-nu kagi-Nka naga-a:M-ba si-na buri: ukī=sja:mi:/ クバの葉 (の) 扇を持って、木の陰で長あくびをしたりして (過ごして) いたのだらうよ。(『民』「多良間シュンカニ」)</p>
<p>アイ¹ [a [i] 感動詞 ①意外なコトに出くわしたりモノゴトに気がついたときなどの、軽い驚きや疑いの気持ちを表す。あっ。おや。 例) アイ ヅヴァマイ キー ブタン /ai qva-mai ki: butaM/ おや、あなたも来ていた (の)。 アイ、ミガー タルンケーヤ マーンティードウ デンワ スイ°タンゲーライ /ai, miga: taru-Nke:ja ma:Nti-du deNwa si-taM=gerai/ あっ、ミガはタルにちゃんと電話したかな。 ②相手へ問いかける、また聞き返すときに発することば。えっ。あれ。 例) アイ、ナマー スーティガ イ°ータリ° /ai, nama: nu-ti-ga i-taL/ え、今なんて言ったの？</p>
<p>アイ² [aɾi] 感動詞 相手の発話を受け、その内容や提案を受け入れる、また肯定的な意見を言い始めるときに用いることば。 例) アイ ユヌムヌ、スダヌ んメー ナマカラ キュージュークューガミ、ナガ ヌツィ° シュダカー ナランニバ、~ /ai junumunu, suda-nu Mme: nama-kara kju:zju:kju:gami, naga nuči sju-daka: nar-aN-niba, ~ / (人間の年齢を決める帳簿を書き損じてしまい、詫びたところ)「うん、良からう、人間たちは今から99 (才) まで、長く生きなければならぬから、(後略)」(『民』「九十九の運」) アイ、ペーフ カリー ワーリ /ai, pefu kari: wa:ri/ ええ、どうぞお借り下さい。(『民』「隠れ着物」)</p>
<p>アイ [ai] 名詞 【間】(2つの)モノゴトによって両端の定められた、空間的あるいは時間的な範囲。あいだ。あいま。 ①主にモノとモノとに挟まれた、空間的な範囲、部分。バシとも。</p>

例) カナガイヌ ヤーヤ、ムヤーバラトウ プカヌ パラトウヌ アイン キタウ パーシー ウイカン ヨーン ツィ°(ツ) フィ°タリ° /kanagai-nu ja:ja muja:baratu puka-nu para-tunu ai-N kita-u pa:si: uika-N jo:N cī(q) fi-taL/ 昔の家は、中柱と他の柱のあいだに梁を渡し、動かないように(して)作った。

②デキゴトの、一続きの時間的な範囲。また2つのデキゴトに挟まれた時間的な範囲、部分。

例) ッファガラシヤヌ タバリ°トウイ ウプガヌ ツィ°ヌー、パッタガパッタ ティ ツツキー ブリ°ケー、ウヌ アイン んマガラシヤー、ナラ トーカシー ニクー んーナ フェーツティー、/qfa-garasja-nu tabaL-tui upuganu cīnu:, paqtagapqtati: cucuki: buL-ke:, unu ai-N Mma-garasja:, nara to:kasi: niku: M:na fe:qti:, / 子鳥が集まって大きな(牛の)角を、カチンカチンとつついているうちに、その間に老鳥は、自分1人で肉を全部食べて、(『民』『老鳥と牛の角』)

イキッティー キィ°ー アイヤ クマン マティーリョー /ikiqti: kī: ai-ja kuma-N matiri=jo:/ (私が)行って(戻って)来る間、ここで待っているよ。

③モノゴトを隔てる、空間的あるいは時間的なあきま。

例) アーヌ タネー サンメートルヌ アイウ トウリー マキヨー /a:-nu tane: saN-me:toru-nu ai-u turi: maki=jo:/ 粟の種は、3メートル(ぐらい)のあいだを空けて播きなさいよ。

パルワジャヌ アイン ヤミー ニニーり° ッファ ミーガ イキィ°タリ° /paru-wazja-nu ai-N jami: nini:L qfa mi:-ga iki-taL/ 畑仕事のあいだに、病気で寝ている子供(の様子を)見に行った。

④モノゴトとモノゴト、またヒトとヒトとの相互の関係。

例) ウキィ°ナーンケー イキィ° ブッサティーヌ カタキィ°ムトウ、スイ°マカラ トウンディ ブッサネーンティーヌ カタキィ°ムヌ アイन्दウ、ッファー キィ°ムヤミーり°ガ ヤウ /ukīna:-Nke: iki buqsa-ti:nu kata-kīmu-tu, sīma-kara tuNdi buqsa-ne:N-ti:nu kata-kīmu-nu ai-N-du, qfa: kīmu-jami:L-ga jau/ 沖縄へ行きたい気持ちと、島から離れたくない気持ちのあいだで、息子は悩んでいるようだ。

ミドゥンブリウ シーり°ガ マー、ウヌ ミウトウラヌ アインヤ パナスィ°マイ シュンティー /miduM-buri-u si:L-ga ma:, unu miutura-nu ai-N-ja panasī-mai sju-N-ti:/ (夫が)浮気をしているせいで、あの夫婦のあいだでは話もしないそうだ。

⑤ヒトやモノゴトの、ある限られた集合、範囲。

例) ムラピ[°]トゥヌ アイ[°]ンヤ んメ ミイ[°]ー ヤクニ[°]ヌ パナスイ[°]ヌ
ドゥ ピイ[°]スイ[°]ガリ[°] ブタリ[°] /murapitu-nu ai-N-ja Mme mi: jakuniN-
nu panasī-nu-du pīsigari: bu-taL/ 村人のあいだでは、すでに新しい役人の噂
が広まっていた。

⑥モノゴトの範囲内における、両端からみた中間。^x

例) クヌママニーヤ パナスエ[°]ー マトゥマランニバ、アイウ トゥリー スイ[°]
トゥガツイ[°]ズイ[°]キイ[°]ン タビイ[°]ンケー イカズイ[°]ー /kunumamani:-ja
panasē: matumar-aN-niba, ai-u turi: situgaci-ziki-N tabi-Nke: ikazī:/ この
ままでは話はまとまらないから、あいだをとって7月に旅行に行くことにしよう。
〔直〕～、あいだをとってお盆(の)月に旅へ行こう〕

アイー [aiɪz] 感動詞

感動詞**アーイー**に同じ。ああそうか。

アイコ [aiko] 名詞

【相子】互いに同じ状態で、勝ち負けや優劣、損得のないこと。あいこ。借用語。

例) キイ[°]ヌーヤ ッヴァガドゥ イシュー デイカスター[°]ルガドゥ、キューヤ バガ
ドゥ デイカスター[°]バ、アイコシャイカ /kinu:-ja qva-ga-du isju: dikasu-taLru-
gadu, kju:-ja ba-ga-du dikasu-taL-ba, aiko=sjaika/ 昨日は君が大漁したが、今日
は僕が大漁だから、あいこだな。〔直〕昨日はあなたが漁を見事にやったが、～〕

アイジュー [aidʒuɪz] 名詞

ゆでた青野菜を、味噌、酢などの調味料と混ぜ合わせて皿に盛ったもの。野菜の和え物。

例) アター アイジューユ スコーリー、ムティー イカダカー ナラン
/ata: aizju:-ju sukori: muti: ika-daka: nar-aN/ 明日は野菜の和え物を用意し
て、(新婦の家に)持っていかなければならない(な)。

アイジョー [aidʒoɪz] 名詞

【愛情】ヒトやモノゴトに対し心から大切に思う気持ち、慈しむ心。借用語。

例) (ドゥーヌ) ミドゥンケー ウンシヌ ヤナフツウ[°]ー スイ[°]ーティーヤ、アイ
ジョー ネーン ピイ[°]トゥナー / (du:-nu) miduMke: uNsinu jana-fucū: sī-ti-
ja, aizjo: ne:N pitu=na:/ 妻にそんなひどい言い方をすると、愛情のない人だ。

アイズ [aizɪz] 名詞

【合図】あらかじめ決めてあった方法で、相手にモノゴトを知らせること。また、その知
らせるための身振りや光、音、符号など。借用語。

例) ティーユ タタキイ[°]ドゥ アイズド[°]ー、アイズヌ キイ[°]カイトカー ピイ[°]タキ
ナ スコーリ[°] ムヌー ムティー クーヨー /ti:-ju tataki-du aizɪz=do: aizɪz-
nu kikai-taka: pitakina suko:L munu: muti: ku:=jo:/ 手を叩くのが合図だよ。
合図が聞こえたらすぐ料理を運んでこいよ。〔直〕～聞こえたらすぐ召し上がるものを持って
こいよ〕

インドゥリ°ヌ ムランケーヌーリー キー ナキイ°ショ、テンキイ°ヤツ
 ヴィ°ヌ アイズティー /iM-duL-nu mura-Nke: nu:ri: ki: nakī-sjo:, tiNkī-
 jaqvī-nu aizu-ti:/ 海鳥が村へ上がってきて鳴くのは、天候がくずれる合図だそうだ。

アイティ [aiti] 名詞

【相手】コトを行う場合の、またモノゴトの、もう一方の側。

①一緒にモノゴトを行うもう一方のヒト。

例) ッヴァガ シャキヌ アイティウバ バガ シューン /baga faki-nu aiti-
 uba ba-ga sju:-M:/ あなたの酒の相手は私がしましょう。

②対抗すること。また、対抗して争うもう一方のヒト。

例) (ウマンケー) イキー、ナラトウ チューク アイティ スィー ニンギンヌ んメ
 ウバー んーナ タイジウ シー スティー ワーリ° / (umaNke:) iki: nara-
 tu cju:ku aiti sī: niNgiN-nu Mme-uba: M:na taizi-u si:
 suti: wa:L/ (そこへ) 行って、自分に強く立ち向かうものは全員退治して捨てなされた。
 {直} ~自分と強く相手(を)する人間たちをみな退治をして捨てなされる {『民』「イグントリ
 ナナツ」}

シーミーティーヤ、シーミーティーヌ ピイ°トウヌ ナードウ アリー ワー
 リ°シャーミー。カリ°ガ アイティヌドゥ アタリ°ルガドゥ ウムイディラリン。
 /si:mi:-ti:-ja, si:mi:-ti:nu pītu-nu na:-du ari: wa:L=sja:mi:. kaL-ga aiti-nu-
 du ataL-gadu umui-dir-ariN/ 清明とは、清明という人の名前ですよ。彼に相手
 があっただけ思いだせない。{直} ~。彼の相手があっただが~ {『民』「清明の話」}

③はたらきかけの対象となるモノ、ヒト。

例) ナマカラー トーケーグラスィ° アリー、トーティー アイティウ タスィ°カ
 ミツティーカラ ヤドゥーバー アキダナー /namakara: to:ke:-
 gurasu ari:, toti: aiti-u tasīkamiqti:-kara jadu:ba: aki-da=na:/ これからは
 1人暮らしなのだから、ちゃんと相手を確認してから戸は開けなさいね。

アイナカ^{xi} [ainaka] 名詞

①モノとモノとに挟まれた、空間的な範囲、部分。(→「**アイ**<名>」の①)

例) アンナトウ ウヤガ アイナカンドゥ ニンタリ° /aNna-tu uja-ga ainaka-
 N-du niN-taL/ 父と母の間に寝た。

②ヒトとヒトとの相互の関係。間柄、仲。(≡「**アイ**<名>」の④)

例) ミウトウラス アイナカー ユードウ ジョーシャーリ°ガ ヤウヨー /miutura-
 nu ainaka: ju:-du zjo:sja:L-ga jau=jo:/ 夫婦の仲はとても良いようだよ。

アイバメ [aipame] 名詞

魚名。ことひき。ヤサカイサキ。スズキ目シマイサキ科の浅海魚。(?)

<p>例) アイパメー ンギヌ アリ°バ ヤウ チューイバ シー シャーリヨー /aipame: Ngi-nu aL-ba jau cju:i-ba si: sja:ri=jo:/ アイパメはとげがあるから、注意して触りなさいよ。</p>
<p>アイマ [aima] 名詞 【合間】モノゴトのとぎれた短い時間。動作や状態の時間的な切れ目。借用語。(≡「アイ<名>」の③、「マドウ」) 例) パルワジャヌ アイマン ヤミー ニニリー° ッファヌ ヨース ミーガ イキ°タリ° /paru-wazja-nu aima-N jami: nini:L qfa-nu jo:su mi:-ga iki-taL/ 畑仕事のあいまに、病気で寝ている子供の様子(を)見に行った。</p>
<p>アイムヌ [aimunnu] 名詞 【和え物】ゆでた青野菜などを、味噌、酢などの調味料と混ぜ合わせて皿に盛ったもの。和え物。</p>
<p>アイヨー [aijo:] 感動詞 驚いたとき、不審に思う時に発する声。ああ。あれあれ。アイヨースーとも。 例) アイヨー ヌーガ シューズー /aijo: nu:-ga sju:-zū:/ ああ、どうしよう。</p>
<p>アイヨースー [aijoxsaz] 感動詞 感動詞アイヨーに同じ。あれあれ。 例) ズィ°ーヌ んマヌパヌ カタカラ、ピィ°トゥカラヌ ピンダヌ ッファヌ クマリ°キ°バ、「アイヨースー」ティー ミー ブリ°バドウ、/zū:-nu Mmanupanu kata-kara, pītu-kara-nu piNda-nu qfa-nu kumari: kī-ba “aijo:sa:”-ti: mi: buL-ke:/ 畑の東南の方から、一匹の山羊の子が(畑の中へ)入って来たので、「あれあれ」と見ているうちに、{直}地の午の方位の方から~} (『民』「バルマツターの由来」)</p>
<p>アイラ [aira] 名詞 魚や肉、野菜などで、良いものあるいは良い部分を選び取った残りのもの、または部分。残りくず。あら。 例) イズトゥレー イズヌ アイラウドゥ フー、んーミーラシェー んーヌ アイラウドゥ フー。/izu-ture: izu-nu aira-u-du fu:, M:-mirasje: M:-nu aira-u-du fu:/ 魚(を)取る人は魚のあらを食う、芋(を)実らせる人は芋の選び残りを食う [諺]</p>
<p>アイリ°¹ [ail] 動詞 (Ⅱ類) 【和える】野菜や魚介に、みそや酢などをまぜあわせて調理する。あえる。 例) イズトゥ ヤシャイウ アイリ°/izu-tu jasjai-u aiL/ 魚と野菜を和える。 シューヌ パーユ んシュニー アイー、シャランケー ウキー ワーリ /sju:-nu pa:-ju Msju-ni: ai:, sjara-Nke: uki: wa:ri/ 野菜の葉を味噌で和えて、皿に盛ってください。{直} ~、皿へ置きなされ }</p>

アイリ² [aiɾi] 動詞 (Ⅱ類)

①乳や膿がしたたり落ちる。吹き出る。

例) ツィーヌ アイリ° /ci:nu aiɾi/ 乳がしたたり落ちる。

んークヌ アイリ°ケガミ スティ ウキィ°タリ°! ヌスタイ ペーペー
 ティ イ°ザダタンガ! /M:ku-nu aiɾi-ke-gami suti ukī-taɾi! nusutai
 pe:pe:ti: iza-dataM=ga/ 膿が吹き出るまでほっておいた(のか)! どうして早く
 言わなかったか!

②熟した豆や種などが、自然に落ちる。こぼれ落ちる。

例) アカマミヌ アインケー ペーペー イキー アシャカギン ムリー クー

/akamami-nu ai-N-ke: pe:pe: iki: asjakagi-N muri: ku:/ 小豆が落ちないう
 ちにさっさと行って、朝の涼しいうちに収穫してこい。{直} 赤豆の落ちないうちに
 早々に行って朝陰にもいでこい!

アイム [aimme] 副詞、感動詞副詞・感動詞 **ム**と同じ。すでに。もう。

例) アガ タンケ アイムメ カレー キー ブタリ° /a-ga ku-N-ke:
 aiMme kare: ki: bu-taɾi/ 私が来ないうちにもう、彼は来ていた。

アイムメ アンシー スィ° (-) ん=シャーミー /aiMme aNsi: si (:)-M
 =sja:mi:/ ああもう、そのようにしていいよ。{直} ああもう、そのようにするんだね。}

アイ° [ai] 名詞

【藍】植物名。あい。葉や茎が藍色の染料となる。

例) シューガ パルヌ カシーヌ スィ°んタカー、アイ°ヌ パーウ トゥリー クー
 ヨー /sju:ga paru-nu kasi-nu siM-taka:, ai-nu pa-u turi: ku:=jo:/ おじい
 さんの畑の手伝いが終わったら、藍の葉を取ってきてね。

アイ°イル [aiiru] 名詞

【藍色】藍で染めた色。あいいろ。紺と青との中間色、濃い青色。

例) ウリ、キチギヌ アイ°イルン シュマリリー°シャー、ジョーディキ/uri,
 kiciginu aiiru-N sjumari:L=sja:, zjo:diki/ ほら、(布が)きれいな藍色に染まって
 いるでしょう。上出来だ。

アイ°イズ [aiizu] 名詞

魚名。アイゴ(藍子)。硬骨魚綱スズキ目アイゴ科に属する海水魚。幼魚の時期は**シュ
 フ**と呼ばれる。

例) アイ°イズーパー ヤマトゥピィ°トー アティナクトゥ ファーンティー
 /aiizu:ba: jamatu-pito: atinakutu fa:N-ti:/ アイゴは内地ではあまり食べないん
 だってよ。

アイ°ガミ [aigami] 名詞

【藍甕】藍を仕込んで発酵させるために使うかめ。藍染めのための道具の1つ。

<p>例) アイ°ダマウ スクマヅジバ、アイ°ガメー ンダンガ カタズキー ウキイ° /äidama-u sikumaqzi-ba, äigame: Nda-N-ga katazuki: uki/ 藍玉を仕込みたい んだけど、藍がめはどこに片づけた？</p>
<p>アイ°ジュミ [äidzumi] 名詞 【藍染め】布や糸などを藍で染めること。またその染めたもの。 例) アイ°ジュミノ キイ°ンユ プッサーリ°ガドウ、タカチャーリ°パズナー /äizjumi-nu kiN-ju puqsa:L-gadu, takasja:L-pazu=na:/ 藍染めの着物が欲しいけ ど、(きっと) 高いだろうなあ。(直) 藍染めの着物を欲しいが、~。†</p>
<p>アイ°ズイ°ー [äizix] 名詞 名詞アイ°ズルの異形態。藍の染液。</p>
<p>アイ°ズイ°ル [äiziru] 名詞 【藍汁】木灰水にアイ°ダマ (藍玉) を溶かし、発酵させたもの。この中に布や糸を入れて、 藍色に染める。染液。アイ°ズイ°ーとも発音される。 例) マイニツイ° キゲーラシャダカー アイ°ズイ°ロー ツイ° (ッ) ファインドー /mainici kige:rasja-daka: äiziro: ci (q) f-aiN=do:/ 毎日かき混ぜないと藍汁は作 れないよ。</p>
<p>アイ°ダマ [äidama] 名詞 【藍玉】藍の葉や茎を水洗いし、アイ°ガミ (藍甕) などの用器に詰めて発酵させ、握っ て丸く固めたもの。 例) アイ°ダマウ ツイ° (ッ) フィ°ティーヤ テイマイダーリ° ムヌヨー /äidma-u ci (q) fi-ti:ja timaida:L munu=jo:/ 藍玉を作るのは手間のかかるものだよ</p>
<p>アイ°ツイ°ブ [äitsibu] 名詞 【藍壺】藍汁を入れて発酵させるためのつぼ。藍染めのための道具の1つ。アイ°ガミよ り小さい。 例) クヌーリ°ヌ アイ°ジュメー、アイ°ツイ°ポー アラングトゥ、ポリバケツ ドゥ ツイ°クーガ ヤウヨー /kunu:L-nu aizjume:, äicibo: araNgutu, poribake cu:du ciku:ga jau=jo:/ 最近の藍染めは、藍つぼじゃなくて、ポリバケツを使う んだって。</p>
<p>アイ°ヌパナ [äinupana] 名詞 【藍の華】発酵によって藍汁から生じる気泡。発酵の具合の目安となる。 例) アイ°ヌパナー ユードゥ ンディーリ°バ んメ シュミライドゥ スイ° /äinupana: ju:du Ndi:L-ba Mme sjumirai-du si/ (水面に) 藍の花は十分に 出ているから、もう染められるよ。</p>

アウ- [au-] 接頭辞

【青】名詞や形容詞の前について、**アウイル**（青色）の性質を帯びている、また未熟な、若いなどの性質を持っているという意味をつけくわえ、派生語を作る。**アウ-**は仲筋での言い方で、塩川では**オー**-と言う。

アウ¹ [au] 動詞（I類D'）^{xii}

【会う・遭う】ヒトやモノゴトに接近・接触する。出くわす。**アウ**は仲筋での言い方で、塩川では**オー**-と言う。

①2人のヒトが互いに、または1人がもう1人の元へ移動して、対面する。

例) アタ マタ クマン カリ°トゥ アウグマタ /ata mata kuma-N kaL-tu au=gumata/ 明日またここで彼と会うつもりだ。
キィ°ヌー カリ°トゥ アウガドゥ トゥビィ°タリ° /kĩnu: kaL-tu au-ga-du tubi-taL/ 昨日彼と会いに行った。^{xiii}

②ヒトと偶然出くわす。出会う。

例) クルーバー フターリ°ガ タゲーン アウタリ° トゥクルヌ、カミサマヌ
トゥ タスキー ワーリー ウキィ°グマタ アリー、/kuru:ba: futa:L-ga, tage:-N, au-taL tukuru-nu, kamisama-nu-du tasuki: wari: uki-gumata ari:/ これは2人が互いに会った所の神様がお助けくださった（もの）に違いないから、（『民』「白銀堂由来」）

③好ましくないデキゴトに出くわす。身に及ぶ。

例) イ°ズトゥリ°ヌ シャナカン カディマーリ°ン アイ、クマガミ ナガシャ
イー キー ネーン /izu-tuL-nu sjanaka-N kadi-ma:L-N ai:, kuma-gami nagasjai: ki: ne:N/ 漁の最中にひどい嵐にあい、ここまで流されてしまったんです。

アウ² [au] 動詞（I類D'）

争う、けんかする。**アウ**は仲筋での言い方で、塩川では**オー**-と言う。

例) ヤラビトー アーンドー /jarabi-to: a:N=do:/ 子供とはけんかするなよ。
デーヌ チューシャータリ° ビキウスェ°ー、アーティーマイ シュングトゥ ピ
ンギー パリ°タリ°ティーヌ パナスィ° /de:N cju:sja:taL bikiusë:, a:ti:-mai sju-N-gutu piŋgi: paL-taL-ti:nu panasi:/ （痩せ牛と戦わせようとする、その）1番強かった雄牛は、闘おうともしないで逃げていったという話。（『民』「もの言う牛」）

アウ³ [au] 動詞（I類D' ?）

【合う】常に否定形で、ヒトとヒトとの意見や好みなどがうまく調和、適合していないことを表す。**アウ¹**、**アウ²**と異なり、この語には地域差による語形の対立がない。

<p>例) カヌ ピィ°トウトー キィ°ムヌ アーン /kanu pītu-to: kīmu-nu a:-N/ あの人とは気が合わない。</p>
<p>アウーアウ (ティー) [auʔau (ti:)] 副詞 【青々と】 形容詞アウシャーリ° (青い) の語幹「アウ-」を繰り返した形 (反復語幹形式) が、副詞へ転用された語。アウイル (青色) をしているさま。特に、作物や草木が、生長し、豊かに枝葉を生え出しているさまを表すのに用いられる。青く。青々と。アウーアウティーは伸筋での言い方で、塩川ではオーオーティーと言う。</p> <p>例) ブーギィ°ヌ パーヌドゥ アウーアウティー フィシェーリ°ンキー /bu:gi-nu pa:nu-du au:auti: fisje:L-Nki:/ サトウキビの葉が青々と生い茂っている。</p>
<p>アウアー [auaʔ] 名詞 【青粟】 粟の種類の一つ。あおあわ。最も収穫量が多く、粘り気の少ないウルチ種。</p> <p>例) クンドー アウアーウ マカズィ°ー /kuNdo: au-a:-u maka-zī:/ 今度は青粟を播く (ぞ)。</p>
<p>アウイル [auiru] 名詞 【青色】 色の名の一つ。あおいろ。主に、良く晴れた空の色から、夏の草木の葉の色に至る、広い範囲の色を指す。また、同系統の色の総称。アウイルは伸筋での言い方で、塩川ではオーイルと言う。</p> <p>例) カーディギーヌ パーヌドゥ キツィ°ギナ アウイルー シーリ° /kadigi:-nu pa:nu-du kicigina airu: si:L/ ももたまの葉がきれいな青色になっているね。</p>
<p>アウカウズィ° [aukauzi]^{xiv} 名詞 【青麴】 麴の種類の一つ。あおこうじ、黒麴。アウカウズィ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーコーズィ°と言う。麦を原料とし、味噌や酒を醸造するのに用いられたため、んシュカウズィ°、シャキカウズィ°とも。</p> <p>例) んシュー ツィ°フィ° パーン アウカウズゥ°ー ツクー /Msju: cifi ba:-N au-kauzü: cuku:/ 味噌を作るときに (は) 青麴を使う。</p>
<p>アウガスイ° [augasi] 動詞 (I類B) 【扇がす】 ヒトに命じ、おうぎなどを使って風を送らせる。あおがせる。アウギィ°¹から派生した使役動詞。アウガスイ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーガスイ°と言う。</p> <p>例) ウカマウバー、ウマツヌ ケーリンヨン ミガン アウガシーリ° /ukama-uba:, umacu-nu ke:ri-N-jo:N miga-N augasi:L/ かまどは、火が消えないようにミガに扇がせている (よ)。</p>
<p>アウカダ [aukada] 名詞 生臭いにおい。アウカダは伸筋での言い方で、塩川ではオーカダと言う。</p> <p>例) ヌーガゲーラ、アウカダ シーリ° /nu:ga-ge:ra, au-kada si:L/ 何やら、生臭いにおい (を) している。</p>

<p>アウギイ° [augi] 名詞</p> <p>【扇】 上下あるいは左右に動かすことにより風を起こすための道具。おうぎ。涼をとる、火を起こすなどの目的で用いられる。刈り取ったクバ(ビロウ)の葉を日光に晒し、形を整えたものが一般的で、これは特にクバナパーアウギイ°(/クバナパーオーギイ°)とも呼ばれる。なお近年は、骨となる竹や木に紙を張り、折り畳めるようにしたもの(いわゆる扇子)も移入されている。アウギイ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーギイ°と言う。</p> <p>例) アウギイ°シー アウギイ° /augi-si: augi/ 扇であおぐ。 クバナパー アウギイ°ガマー ムットウイ、キース カギンカ ナガアーンバ シーナ ブリー ウキイ°シャーミー /kuba-nu-pa: augi-gama: muqtui, ki-nu kagi-Nka naga-a:M-ba si-na buri: uki=sja:mi:/ ビロウの葉(の)扇を持って、木の陰で長あくびをしたりして(過ごして)いたのだらうよ。(『民』「多良間シュンカニ」)</p>
<p>アウギイ°¹ [augi] 動詞 (I類A)</p> <p>【扇ぐ】 おうぎなどを上下あるいは左右に動かし、風を起こす。あおぐ。アウギイ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーギイ°と言う。</p> <p>例) アッチャン ニディラリンニー イミッチャ アウギー ッフイル /aqcjaN nidir-ariN-ni: imiqcja augi: qfiru/ 暑くてたえられないから、ちょっと扇いでくれ。</p>
<p>アウギイ°² [augi] 動詞 (I類A)</p> <p>【仰ぐ】 顔の正面を上に向けて上方を見る。見上げる、あおぐ。なお、アウギイ°¹とは異なり、この語には地域差による語形の対立がない。</p> <p>例) スイ°マジューヌ ピイ°トゥヌ んメ、ティンバ アウギー、ユガプーアミウ ニグータリ° /sima-zju:nu pitu-nu Mme tiN-ba augi:, jugapu:ami-u nigu:taL/ 村中の人々(が)天を仰いで、恵みの雨(の降ること)を願った。</p>
<p>アウク [aukwu] 名詞</p> <p>もっこや紐つきの竹かご、ざるを掛けて、肩で担ぐための棒。にない棒、かつぎ棒。両端に鉤がついている。アウクは伸筋での言い方で、塩川ではオークと言う。パウ(/ポー)とも。</p> <p>例) ッヴァー ミダ ドゥーヌ イミシャーリ°バ、アウクニー カタミッロー ムツカッサダーリ° /qva: mida du-nu imisja:L-ba, auku-ni: katamiqro: mucukaqsada:L/ お前はまだ体が小さいから、かつぎ棒で担ぐのは難しいよ。</p>
<p>アウシャーリ° [auʃaxl] 形容詞</p> <p>【青さあり】 アウイル(青色)の状態である、アウイルをしている。青い。指し示す色の範囲については「アウイル」を参照。また、果実などに用いる場合は、まだ熟していないという含みも持つ^{xv}。アウシャーリ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーシャーリ°と言う。</p> <p>例) キューヌ ティンニーヤ カワリードゥ アウシャーリ° /kju:-nu tiNni:-ja kawari-du ausja:L/ 今日の空は特別に青い。</p>

ウヌ ナリ°ヤ ミダ アウシャダーリ° /unu naL-ja mida ausjada:L/ その
実はまだ青い。

ミパナヌ アウシャーリ°ルガ、ヌーヌ バーガ /mipana-nu ausja:Lruga, nu-
nu ba:=ga/ 顔が青いけど、どうしたの？

アウシャガナギ [auʃaganagi] 副詞

ある状態、状況が非常に長く続いているさま。一生。ずっと。**アウシャガナギ**は伸筋
での言い方で、塩川では**オーシャガナギ**と言う。

例) ウェー ヅヴァ アウシャガナギ タウカームヌー シー ブラルーナ、イシュガ
ダー /we: qva ausjaganagi tauka:munu: si: bur-aM:=na, isjuga-da:/ ああ、
お前（は）ずっと独身でいるつもりか、急ぎなさい。{直} ああ、あなた（は）ずっと独
り者をしているのか、急いだら}

アウシャビィ° [auʃabi] 名詞

【青錆】銅や真ちゅうの表面にできる緑色のさび。緑青銅青。あおさび。十円玉や煙管の
吸い口および火皿、真鍮製の鍋などに見られた。**アウシャビィ°**は伸筋での言い方で、塩
川では**オーシャビィ°**という。

例) アカジンードウ アウシャビィ°ヌ ツキー ネーンユー /akaziN:-du ausjabi-
nu cuki: ne:N=ju:/ 十円玉に青サビがついてしまったよ。

アウジュー [audʒu:] 名詞

主に、草本性で食用となる緑色の植物の総称。青野菜、葉野菜。ノビルやアキノノゲ
シなどの野草類、またエン菜や大根の葉などを指す。**アウジュー**は伸筋での言い方で、
塩川では**オージュー**と言う。**アウパ**（/オーパ）などとも。

例) アウジューヤ スィ°ル スィ°バン んブシャバン、んマ ムヌ /auzju:-
ja sīru sī-baM Mbusja-baM, Mma munu/ 青野菜は汁物（に）しても煮物に
しても美味しい。{直} 青野菜は汁（に）しても蒸しても~}

アウダ [auda] 名詞

【持籠】主に農作業の際に、作物や農具などを入れて運ぶための道具。もっこ。縄を、向
かい合わせの2辺の網目が環状となるように四角く編み、その網目の環に吊り網を通し
て繋ぎ、にない棒に掛けて使用する。**アウダ**は伸筋での言い方で、塩川では**オーダ**と言う。

例) カナガイヤ ドウータニー アウダウ アミー、ツファツマイ ヤシャイマイ、ヌー
マイ カタミタリ° /kanagai-ja du:-ta-ni: auda-u ami:, qfacu-mai jasjai-
mai, nu:mai katami-taL/ 昔は自分たちでもっこを編んで、畝も野菜も、何でも運
んだ。

アウダキ [audaki] 名詞

【青竹】幹が鮮やかな緑色をしている竹。また、加工のために乾燥させる前の状態にある
竹。後者の場合、**ナマダキ**とも。**アウダキ**は伸筋での言い方で、塩川では**オーダキ**と言う。

<p>例) アウダキウバ ヤウダキ シャラシッティー アラダカー ツカーイン /audaki-uba jaudaki sjarasi-qtī: ara-daka: cuk-ai-N/ 青竹はよく乾燥させていないと使えない。</p>
<p>アウタフタフ (ティー) [dutaΦutaΦu (ti)] 副詞 作物や草木が、生長し、豊かに枝葉を生え出しているさまを表すのに用いられる。副詞タフタフに接頭辞アウ-がついた派生副詞。アウタフタフは仲筋での言い方で、塩川ではオータフタフと言う。</p> <p>例) ブーギィヌ パーヌドゥ アウタフタフティー フィシェーリ°ンキー /bu:gi-nu pa-nu-du au-tafutafuti: fisje:L-Nki/ サトウキビの葉が青々と生い茂っている。</p>
<p>アウティン [autin] 名詞 【青天】 晴れ上がり、鮮やかな青色をしている日中の空。青空。セイテンとも (借用語)。アウティンは仲筋での言い方で、塩川ではオーティンと言う。</p> <p>例) パリン アミティーヤ ネーン. アター パリトゥイ アウティンドゥ ナリ° /pari-N ami-ti:ja ne:N. ata: pari-tui autiN-du naL/ 晴れない雨とはない。明日は晴れて青空になる (よ)。 アウティンバ ミードゥ ブッロー /autiN-ba mi:du buqro:/ (雲の隙間から) 青空が見えているよ。</p>
<p>アウナバ [aunaba] 名詞 古木や湿地、岩石、水底などにへばりつくように生える、緑色をした小型の植物の群生。蘚苔 (せんたい) 類などのコケ植物や藍藻 (らんそう) などの総称。緑色の苔。青苔。アウナバは仲筋での言い方で、塩川ではオーナバと言う。</p> <p>例) ウマンヤ アウナバナ ツキー ブリ°バ、ナツヴリ°んどー、ヤウ キウツキトゥイ ウリル /uma-N-ja aunaba-nu cuki: buL-ba naqvuLM=do:, jau kiucukitui uriru/ そこは青苔が生えているから滑るよ。気をつけて降りなさい。</p>
<p>アウニシャイ [aunifai] 名詞 【青二才】 名詞アウヤラビに同じ。未熟者、青二才。名詞ニシャイに接頭辞アウ-がついた派生名詞。アウニシャイは仲筋での言い方で、塩川ではオーニシャイと言う。</p> <p>例) ウレー アウニシャイ ヤリーシャーミー、ムヌカンガイヌ シライン /ure: au nisjai jari:=sja:mi:, munu-kaNgai-nu sirai-N/ あの人は未熟者だよ、機転もきかない。(直) あれは青二才だな、もの考えができない)</p>
<p>アウパ [aupā] 名詞 【青葉】 名詞アウジュに同じ。青野菜。アウパは仲筋での言い方で、塩川ではオーパと言う。</p> <p>例) ウヌ ナビンカンケー ヅヴァガ ナマ トゥリー キィ°タリ° アウパウ イ°ジル /unu nabi-Nka-Nke: qva-ga nama turi: kī-taL aupā-u iziru/ その鍋にあなたが今採ってきた青野菜を入れなさい。</p>

<p>アウバイ° [aubai] 名詞</p> <p>【青蠅】クロバエ科のハエの一種。また、大型で、腹部が金緑色ないし青緑色の金属のような光沢を帯びているハエの総称。金蠅。銀蠅。アウバイ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーバイ°と言う。</p> <p>例) ムティー キイ°タリ° アウバイ°ユ、ミドゥんツヴァヌ パナヌ ミーンカン ケー クミリ°バドゥ、 /muti: kī-taL aubaï-ju, miduMqva-nu pana-nu mi-Nka-Nke: kumiL-badu,/ (男が)持ってきた青蠅を、(死んでしまった)娘の鼻の穴へ込めると、『民』『金蠅のたましい』)</p>
<p>アウバトゥ [aubatu] 名詞</p> <p>【青鳩】ハト目・ハト科に属する鳥類の一種。ズアカアオバト(頭赤青鳩)。林などに生息していて、集落内に現れることは稀である。アウバトゥは伸筋での言い方で、塩川ではオーバトゥと言う。</p> <p>例) アイ、アウバトゥガマヌ トゥバガリーり° /ai, aubatu-gama-nu tubagari:L/ あ、アオバトが飛んでいる。</p>
<p>アウパナ [aupana] 名詞</p> <p>【青洩】緑色がかかった粘り気のある鼻水、またそれを垂らしているヒト。あおっぱな。蛋白質の摂取が不足すると大量に分泌され、成長期の子供などに多く見られた。アウパナは伸筋での言い方で、塩川ではオーパナと言う。</p> <p>例) アウパナヌ ツカリー、シュディヌドゥ カパカパティー シーり° /aupana-nu cukari:, sjudi-nu-du kapakapati: si:L/ あおっぱながついて、袖がゴワゴワになっている。</p>
<p>アウパナダリ° [aupanadal] 名詞</p> <p>【青洩垂れ】緑色がかかった粘り気のある鼻水を垂らしていること、また垂らしているヒト。あおっぱなたれ。アウパナダリ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーパナダリ°と言う。なお、アウパナダリ°(/オーパナダリ°)と発音されるのが普通。</p> <p>例) トゥナリ°ヌ タルー、アウパナダリ° ヤラビティー ウメー ブタカー カンシー んメ チューガッコーター /tunaL-nu taru:, au-panadaL jarabiti: ume: bu-taka: kaNsi: Mme cju:gaqko:-ti:/ 隣のタルは、青っぱなたれ(の)子供だと思っていたらもう中学校だって(よ)。</p>
<p>アウパン [aupan] 名詞</p> <p>【青班】乳幼児のしりや腰などにみられる薄い青灰色の斑紋。蒙古斑。小児斑。モンゴロイド系と呼ばれる人種に特徴的なものであり、一般的には7,8歳ごろまでに自然消失する。アウパンは伸筋での言い方で、塩川ではオーパンと言う。</p>

<p>例) んメ ゴネンシェイン ナリーり°ルガドゥ、ミダ アウパンヌ アり°バ パズィ° カシャーり° /Mme goneNsjei-N nari:Lru-gadu, mida aupaN-nu aL-ba pazika-sja:L/ もう (小学校の) 5年生になっているのに、まだ蒙古斑があって恥ず かしい。</p>
<p>アウパンダリ° [aupandal] 名詞 名詞アウパナダリ°の異形態。あおっぱなたれ。</p>
<p>アウビルビルー (ティー) [aubirubiruz (ti)] 副詞 豆類などの実がすずなりに成っているさまや、こうじの発酵によって盛んに気泡が生 じているさま、また青鳩の羽など色の鮮やかであるさまなどを表すのに用いられる。ア ウイルのものに対してしか用いられない。副詞ビルビルーに接頭辞アウ-がついた派生副 詞。アウビルビルーは伸筋での言い方で、塩川ではオービルビルーと言う。</p> <p>例) アウマミヌ アウビルビルーティードゥ ブッラー /aumami-nu au-birubiru:ti- du buqra:/ 青豆がすずなりにを成っているよ。</p>
<p>アウフクリ [auΦukuri] 名詞 打撲などによって皮下で内出血が起こり、その部分が青黒くふくれあがること、また その部位。アウフクリは伸筋での言い方で、塩川ではオーフクリと言う。</p> <p>例) イシジャリミツィ°ン マルビッティー ツブスヌ アウフクリ シー ブり° /isizjarimici-N marubiqti: cubusu-nu aufukuri si: buL/ 砂利道で転んでひざ が青くふくれ上がっている。{直} ~ひざが青ふくれ (を) している} アウフクレー ピィ°グラスバドゥ ノーり° /aufukure: piğurasu-badu no:L/ 青ふ くれは冷やしたら治るよ。</p>
<p>アウフシャシャーリ° [auΦuʃaʃaʃɾi] 形容詞 【青臭さあり】生の獣肉や魚介に特有のにおいがしている。生臭い。形容詞フシャシャー リ°に接頭辞アウ-がついた派生形容詞。アウフシャシャーリ°は伸筋での言い方で、塩川 ではオーフシャシャーリ°と言う。</p> <p>例) イ°ズウ°ー バッジュー ティーヤ アウフシャシャン ナラン /izü: baqzju: ti:ja au-fusjasjaN nar-aN/ 魚をさばいた手は生臭くてならない。</p>
<p>アウベー [aubex] 名詞 タカ目ハヤブサ科の鳥。チョウゲンボウの雄(?)。まぐそだか。全長は約35cmで、ハ ヤブサ科の中では小型から中型に属する。雄は頭と尾が青灰色で、背面は栗色、腹面は 淡黄色で、いずれにも黒い斑模様がある。アウベーは伸筋での言い方で、塩川ではオーベ ーと言う。</p> <p>例) アウベーヤ インドゥ イ°ズウ°ー トゥリー フー /aube:ja iM-du izü: turi: fu:/ チョウゲンボウは海で魚をとって食べる。</p>

<p>ピーシャ ナリ°タカー アウベース トゥバガリー キイ°ー /pi:sja naL-taka: aube:nu tubagari: ki:/ 寒くなると、チョウゲンボウが飛んでくる。</p>
<p>アウベリ° [aubeɾi] 動詞 (I類C) 身体の衰弱や恐怖、衝撃などのために、血の気が引いて顔の色が青白くなる。あおざめる。アウベリ°は仲筋での言い方で、塩川ではオーベリ°と言う。 例) アティ ウドウルキイ° スイ°トウイドウ ミパナヌ アウベリ° ブリ° /ati uduruki situi-du mipana-nu aube:ri: buL/ あまりに驚いて顔が青ざめている。</p>
<p>アウマミ [aumami] 名詞 【青豆】 マメ科の一年生植物。高さは約50cmで、長さ5~10cmのさやをつけ、中に緑色か灰黒色の豆が10粒ほど生る。緑豆。小豆より小粒で、そのまま食されるほか、もやしの原料となる。アウマミは仲筋での言い方で、塩川ではオーマミと言う。タラママミとも。 例) ジュウグヤンヤ、アウマミ、アカマミシードウ フカギウ ツイ°フィー ウェーシり°ドー /zju:guja-N-ja, aumami, akamami-si:-du fukagi-uc ifi: wesil=do:/ 十五夜には、緑豆や小豆でフカギを作ってお供えしているよ。</p>
<p>アウミパナ [aumipana] 名詞 身体の衰弱や恐怖、衝撃などのために、血の気が引いて赤みを失った顔。青い顔。アウミパナは仲筋での言い方で、塩川ではオーミパナと言う。 例) ヤントウイドウ アウミパナウ シーり° /jaM-tui-du au-mipana-u si:L/ 病気をしている青い顔をしている。</p>
<p>アウムスイ° [aumusi] 名詞 【青虫】 蝶や蛾の幼虫のうち、体が緑色で長毛をもたないものの総称。あおむし。主にモンシロチョウの幼虫を指すことが多い。草木に寄生してその葉を食べ、農作物を食害することがある。アウムスイ°は仲筋での言い方で、塩川ではオームスイ°と言う。 例) クヌ タマナー、アウムスイ°ン ファーイー ンダクダ アナテーン ナシー ウキイ° /kunu tamana:, aumusi-N fai: Ndakuda ana-te:N nasi: uki:/ このキャベツ、青虫に食われてあちこち穴だらけ(に)になっている。</p>
<p>アウムヌ [aumunu] 名詞 【青物】 食用となる緑色の植物の総称。あおももの。アウジュとほぼ同義で用いられることが多い。アウムヌは仲筋での言い方で、塩川ではオームヌと言う。 例) キューヤ イ°ズトゥ アウムヌヌ スイ°ルガマウ フーブッサーり° /kju:ja izu-tu aumunu-nu siru-gama-u fu:buqsa:L/ 今日は魚と青物のお汁が食べた。</p>
<p>アウメー [aumeɾ] 名詞 肉体的な力により争い競うこと。けんかすること。アウメーは仲筋での言い方で、塩川ではオーメーと言う。</p>

<p>アウヤー [aujaꜜ] 名詞</p> <p>主にヒトとヒトとの間において、その意見や利害の対立を、言葉あるいは肉体的な力を用いて争うこと。言い争いや殴り合い。けんか。アウヤーは伸筋での言い方で、塩川ではオーヤーと言う。</p> <p>例) マタ ブトー トウズイ°ヌ プーギイ°ヌドウ ピンナシャーリ°バ シミタカードウ、トウズイ°マイ バッチャバッチャティー、アトー アウヤーウ シー、 /mata buto: tuzi-nu pu:gi-nu-du piNnasja:L-ba simi-taka:-du, tuzi-mai baqꜜjabaqꜜjati:, ato: auja:u si:/ また夫は妻の様子がおかしいので責めると、妻もぶつぶつと（言ってきて）、しまいにはけんかになって、{直}~, 後はけんかをして{ (『民』「黄金のかめ」)</p>
<p>アウヤシャイ [aujaʃai] 名詞</p> <p>【青野菜】名詞アウジューに同じ。青野菜。名詞ヤシャイに接頭辞アウ-がついた派生名詞で、新語である。アウヤシャイは伸筋での言い方で、塩川ではオーヤシャイと言う。</p>
<p>アウヤラビ [aujarabi] 名詞</p> <p>【青童】経験が足りない、その考え方が未熟である人。青二才、未熟者。主に男性に対して使うことばであり、相手をけなして言う場合や、自分を謙遜して言う場合に用いる。名詞ニシャイに接頭辞アウ-がついた派生名詞。アウニシャイは伸筋での言い方で、塩川ではオーニシャイと言う。</p> <p>例) アンシヌ アウヤラビンヤ マツリ°ヌ シキニンヤ スミライン /aNsinu aujarabi-N-ja macuL-nu sikiniN-ja sumir-aiN/ あんな未熟者には、祭りの責任は任せられない。</p>
<p>アウリ° [auɽ] 動詞 (I類C)</p> <p>【呷る】上を向いて、酒などをひと息に飲む。あおる。アウリ°は伸筋での言い方で、塩川ではオーリ°と言う。</p> <p>例) イトゥマ スイ°ー ジカンー ナリ°タカー、シャキウ ピイトウイキイ°シー アウリ°タリ° /ituma si: zikaN: naL-taka:, sjaki-u pituiki-si: auL-taL/ 帰る時間になったので、酒を一気に飲んだ。</p>
<p>アウン [aum] 動詞 (I類C)</p> <p>【青む】アウイル（青色）の状態に変化する、アウイルの色味を帯びる。青くなる。あおむ。指し示す色の範囲については「アウイル」を参照。果実や、肌の色などに用いられる。アウンは伸筋での言い方で、塩川ではオーんと言う。</p> <p>例) ツブスヌ アウミーリ°ガ ヌーガ スイ°タリ°? マルビイ°タリ°? /cubusunu aumi:L-ga nu:ga si-taL (ノ) marubi-taL (ノ) / 膝が青くなっているけど、どうしたの? 転んだ?</p>

- i 方言辞典作成を念頭におきつつ発表された「語彙資料」は決して少なくない。本稿の記述には、加治工真市・福治友邦「『久高島方言辞典』福治友邦・加治工真市共著」出版のために」（法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』29）を特に参考としている。
- ii 平山輝男ほか編『現代日本語方言大辞典』に記載のある場合は、発音記号も付されている。
- iii 具体的には、意味記述のし方をはじめ、新たにつけくわえられた用例の音価、用いられている語形、その共通語訳の妥当性など、全ての内容を確認、検討している。また、下地が示した案を手がかりに用例の作成も行っている。なお、『民話』などから求めた用例に「多良間島方言らしくない」表現が用いられていても、校正は音価と形式のみに留めた。（『民話』については下地賀代子2006『多良間方言の空間と時間の表現』（学位論文）の〈資料編〉も参照されたい。）
- iv 渡久山朝一氏、下地一男の言語歴について、両名とも言語形成期を多良間島で過ごし、現在は沖縄本島に在住している。だが、移住後も家庭内では多良間島方言での生活を送り、家庭外でも郷友会などを通して日常的に方言を使用する機会に恵まれている。
- v 表について、
- (1) *は未確認の音節、- は体系的あきま。未確認の音節の仮名表記も、(()) に入れて示した。また出現が稀である、あるいはそのほとんどが共通語由来の語において現れている音節は、() に入れて示した。
- (2) /ci, si, zi/は母語話者の音声感覚に従い、「ツイ°」「スイ°」「ズイ°」のように表記する。
- (3) 「ん」/M/について、/i, e, ü/という特殊な母音の表記との区別を明確にするため、『村史』などに見られる「°」をつける表記法（「ム°」）は採用しない。
- (4) なお「り°」/L/も、(3)の「ん」/M/と同様の表記法が採られるべきであろうが、書体によっては「リ」/ri/との見分けの付きにくくなる場合のあることから（ex.ゴシック体「リ」・「リ」）、「°」をつける表記法を採用する。但し、片仮名ではなく平仮名の「り」を用いる。
- (5) 母音について、/ë:/と/ü:/を除く、全ての母音に長短の区別があるが（ex. /a/と/a:/）、表には短母音のみを示した。また長音記号として、[x]の代わりに/:/（コロン）を用いている。
- なお、(2)の「スイ°」「ズイ°」について、[si]ではなく[su]に近い音で現れることもあり、発話する個人によって音にゆれが見られる（同一話者の1回目と2回目の発音が異なっているという場合も見られた）。地域差あるいは語レベルでの変異の可能性があるが、現在確認中であるため、本稿では便宜的に/si/、/zi/で統一した。
- また「ジ」/zji/、「ズイ」/zi/について、語によって歯茎硬口蓋音（[dʒ~ʒ]）と歯茎音（[dz~z]）のいずれかを用いるかが区別されているようである。音韻的にも異なるものとして個別に立ちうるかどうか、現在検討を重ねている。本稿では同じく便宜的に歯茎硬口蓋音を「ジ」/zji/、歯茎音を「ズイ」/zi/のように区別して示している。
- vi 詳細は下地賀代子2006『多良間方言の空間と時間の表現』（学位論文、千葉大学）を参照されたい。
- vii 用例について、『民』は『民話』を表す。なお、『民話』の元となった音声資料から用例を取っている

場合は<音>のように示した。

viii 「どうして」について、塩川では主に「ヌスタイ」、仲筋では主に「ヌツタイ」をそれぞれ使う。

ix 「作った」について、塩川では「ツイ°ッフィ°タリ°」のように促音が入り、仲筋では「ツイ°フィ°タリ°」のように促音が入らない。以下、その他の活用形についても同じ。

x この用法では、**アイ**ではなく（**アイ**）**ナカ**を用いるのが普通。

xi いずれの用法においても、単に**ナカ**（中、伸）と言う方が普通。

xii 志向形（*アー（会おう））の形はほとんど使われない。代わりに**イジャウ**（/イジョー）の志向形を用いる。

xiii この用例は、「カリ°ン アウガドゥ〜」のようにni格でも言える。

xiv 発音に関して、近年は「(アウカウ)ズイ° (zi)」ではなく「ズ (zu)」で発音されることが多い

xv 現代共通語の「青い」とは異なり、「あいつはまだ青い」などのような言い方はできない。